




無才能で  辺境の島で
孤独な王子は
優雅な  スローライフ  を
送りたい

キング
著 k-ing

ill. さかなへん



ヒツジ

自称
「ケットシー」の
白虎。

コボスケ

自称
「コボルト」の
フェニル。

メアリー

アドルの姉で
「魔法神の申し子」と
呼ばれるほどの
魔法の才能の
持ち主。

“魚”

さかな
自称「魚」。
沼に住む
リサードマン(?)。

アドル

本編の主人公。10歳。
自分に才能がないことに
悩んでいるが、
実はものすごい
魅力の持ち主。

ササミ

自称「コウモリ」の
フェニックスの
赤ちゃん。

主な登場人物



序章 末っ子、追放される？

「アドル、お前は本当にアレクサンドラ王国の王族か？」

僕——十歳のアドルは、国王である実のお父様にそう聞かれた。確かに、僕は何もできない人間だ。小さい頃から英才教育を受け、何かしらの才能を開花させるのがアレクサンドラ王国の王族の特徴だ。

そのやり方は、時代によって異なるが、才能がない者はいなかったという。

今の第一王子にはカリスマがある。しかも、それだけではなく、勉強・魔法・剣術どれをとってもトップクラスの實力を持っている。

だが、どこがおかしい。

第二王子は知性に恵まれている。幼少期から発明の才能に目覚めて、便利な魔道具を次々と生み出しこの国を発展させた。今までの魔法中心の生活から、魔石を使用する魔道具中心の生活に変えてしまった。

だが、どこがおかしい。

他にも姉が二人いるが、その二人も優秀ながらどこがおかしい。

そんな中、末っ子の三男として生まれた僕には才能がない。他の兄妹はどんどん才能を開花させ

ていく中、僕にはなんの才能も開花しないまま十歳になってしまった。これから学園に通う予定だったというのに。

そういう意味では、僕もどこかおかしいのだろう。

「一度外に出て世界を知ってみるといい。アドルの才能は部屋では開花しないかもしれないからな」優しい口調で言っているが、父は僕の存在が邪魔になったのだろう。

兄や姉も、僕に対しては冷たい。

今まで友達だと思っていた人たちも、僕が無才能だと知るとすぐに離れていく。

才能がないやつと関わっても自分たちにメリットがないことに気づくのだろう。

頼れる家族もいなければ、親しい友人もない。

そんな僕に、旅に出よ、との道を示してくれた。

「わかりました。今までお世話になりました。感謝しております」

すぐに荷物をまとめた僕は、まず遠く離れた辺境の地を目指すことにした。

いつかアレクサンドラ王国に帰ってきたときには、僕も国を支えられる人物になる。

そんな夢を描いて、次の日に辺境へ向かった。

「ここはどこなんだ？」

僕はこの国の辺境を目指していたはずだ。だが現在、遠く離れたところに、目的地であるはずのその地が見える。

何日も海を船で移動して着いたのは、辺境の周辺にある地図上には存在しない島だった。だから、あの船の船長は、ここで降ろしてもいいのかと何回も聞いたのだろう。

船から降りてしまい帰る手段を失った僕は、一人で島で生きていくしかない。

もう少し早く間違いに気づいていればこんなことにはならなかったのに、父に追い出された悲しみで判断力が鈍っていたのだろうか。

「とりあえずあの辺境に行く手段を探るか」

落ち込んでいても仕方がないと思った僕は、島の大きさを把握するために海沿いを歩く。

元々一人での行動は慣れていないから問題はない。ただ、しばらく一人で生きていくためには、衣食住をどうにかしないといけないだろう。

幸い、才能はないが剣や弓は勉強したことがある。

一応、身を守る手段も持ってきている。

「それにしても自然豊かだね」

海沿いを歩いてわかったことは、この島が中心部に向かって山になっていることだ。

簡単にいえば、僕がいる海沿いから中央に向かって森があり、その先に山が見えている。

まず一番の目標は、安全に生活できるように環境を整えることだろう。

森の中を探索するために足を踏み入れると、突然何かが走ってきた。

全身がふさふさとした毛に包まれ、大きき的には僕の倍以上はありそうだ。巨大な狼にも見える。危険な魔物か動物かわからない存在は、僕に抱きついてきた。

「離して！」

『拙者をお助けください！』

大きさに、僕の方が助けてもらう側だろう。

それに、離してほしいとは言ったが、話せとは言っていない。

『お主、話せるのか？』

僕としては、逆に謎のもふもふした目の前の存在が話せる方が驚きだ。

『拙者の話を聞いてくれないか？』

「話ぐらいならいいですよ」

『へへへ』

話を聞かないと離してもらえないだろう。僕は洩々、謎のもふもふの話を聞くことにした。

『——拙者、ここにずっと一人で住んでいるのだ。どこにも友達はいないし、寂しくコソコソと生活して……お主、聞いているのか？』

謎の生物は、しばらく自分のことを語った。僕も命がけで聞いていたけど、あまりにももふもふとした毛に包まれていたから、半分以上聞き逃していた。

触り心地のいい毛だから、きつと高く売れるだろう。

「聞いているよ」

『それで、お主はどうなんだ？』

あまりにも気持ちよくて、話の内容を覚えていない。

そもそも長すぎて、体感で一時間以上は経っている気がする。

「あー、いいよ」

とりあえず、襲われないように肯定することにした。

基本何をするかわからない存在を否定して殺されるのだけは勘弁だ。

『へへへ、拙者に初めての友達ができたぞ！』

僕を抱き上げて、ぐるぐると回る謎の生物。

口からは、キラリと光る牙が見えた。

どうやら選択肢は間違えていないようだ。でも、これからこの謎の生物と一緒にいるのか……

ああ、僕の人生はここで終わりのような気がした。



「お父様、どうということですか!?」

長女の MARIA が突然王である私に掴みかかってきた。

その後ろからも、子どもたちがゾロゾロと部屋に入ってきた。

「MARIA、離しなさい」

「嫌ですわ！ アドルを追い出したってどうということよ！」



別に、アドルを追い出したわけではない。あいつは王族なのに才能に恵まれなかった。だから、学園に通う前に町で気分転換するように声をかけただけだ。

アドルはずっと城にこもっていて、誰とも接することがなかったからね。人と触れ合えば、自分のやりたいことや知らないことがわかるかもしれないからな。

「マリア姉さん、そんな糞親父に何を言っても無駄だよ。俺たちがどれだけアドルを愛して、才能が芽生えないようにしていたのか気づいてないんだよ」

それはどういうことだ。そもそもアドルは、一人でいることが多かった。それもあって、私はアドルに今回の提案をしたのだ。

「俺は、アドルがかっこいいって言ってくれるから、次期国王になるために努力してきたんだ！あいつがいなければ国王なんてやる意味はない」

「それを言ったら私なんて、どこかの馬の骨に取られないように、令嬢たちを排除してきたわ」

長男のレオンは、幼い頃からアドルを部屋に閉じ込めてあまり出てこられないようにしていた。外に出すのは危険だと常に言っていた。マリアもそれに賛成していたはずだ。

あの行動は、嫌いだっただからやっていたのではないのか？

「ああ、それは僕も同じだよ。アドルが何もしなくていいように魔道具を開発したのに、アドルがいなければ意味がない」

「アドルは令嬢たちから大人気だもんね。私が何回忘却魔法を彼女らにかけたと思っっているのよ」

魔法が得意な次男アーサーと次女メアリーも、何を言っているのだろうか。我が息子と娘ながらだんだん怖くなってきたぞ。

「いや、紳士たちにも人気だね。俺が学園にいたときも、剣術部のみんなでファンクラブを作るぐらいだったからな」

「ああ、アドルをお披露目会で見ただけで、次の日にはこそぞって許嫁との婚約を破棄する人たちが集まったファンクラブですか」

レオンやアーサーが言っているのは、本当にアドルのことなのか。

まさか、ここまでみんなに好かれているとは思ひもなかった。いや、これは、アドルに人から愛されるという才能があったことに気づかなかった私のせいかもしれない。

「それで、糞親父はアドルがどこに行っただのか知っているのか？」

レオンが私に高圧的に聞いてくる。

「あー、外の世界を旅してこい——」

「「「はあん？」」」

四人の声がハーモニーを奏でるように重なった。

その迫力に、私は体の力が抜けてしまう。

アドルがこんなに兄妹たちに愛されているなんて知らなかった。

王妃である妻が亡くなって、私は知らないふりをしていたのかもしれない。

子どもたちや貴族に足りない愛を、アドルが与えていたことを——

「とりあえず、レオンは貴族たちに気づかれぬように、彼らをまとめてください。ファンクラブが暴走したら、きつとアレクサンドラ王国は破滅に向かうわ」

「ああ、わかっている、マリア姉さん。ファンクラブの幹部は全員公爵家の者だからな」

レオンの言葉に私は震えそうになった。公爵家の人々が急に婚約破棄したのは、アドルが関わっていたのか。

我々王族は貴族に支えられている。その中でも特に公爵の力は大きい。私たちは公爵たちに生かされていると言ってもいいくらいだ。

「公爵たちが反乱なんか起こしたら、我が国は——」

私が思わず発した言葉を、アーサーが継いだ。

「必ず滅ぶね。ちなみに、魔法省も全力で魔法をぶっ放すと思うよ。この間、アドルが魔法の勉強がしたいって無邪気で愛らしい顔で来たときなんて、見本で山を一つ簡単にぶっ飛ばしたからね」
山を吹っ飛ばしたってどういうことだ。

魔法省はこの国を支えている機関の一つだ。そんなところが強大な力を王族に向けたら、確実に王族のみならずこの国も終わるだろう。

それに、魔法省は城の中にあるが、アドルは部屋にこもっていたわけではないのか？

私はアドルのことだけではなく、この国のことすら知らなかったのか？

子どもたちもだが、この国の人々は頭がおかしいぞ。

「それで、お父様はどうやって責任を取るつもりなのかしら？」

「きつとお父様だから、何か魔法をかけてアドルを監視しているのよね？」
マリアとメアリーに問い詰められる。

「だ……大丈夫だ！」

探知魔法でアドルの居場所は把握している。

私は魔力を広げて、すぐにアドルの居場所を確認した。

「あつ……」

何度も何度も探すが、探知魔法に引っかからない。何者かに解除された形跡がある。

「お父様……？ いや、ただのハゲ親父、ぶっ殺してやる！」

魔法神まほうしんの申し子と言われているメアリーが魔法を発動させた。

百本以上の剣をどこからか召喚して、その全てを王である私に向ける。

普通に考えれば反逆罪だが、そんなの気にしないのだろう。

私の娘が好きすぎて少しばかりおかしくなっているからな。

「ちよつと、レオン兄さんとメアリー姉さんもメアリーを止めて。メアリーが一番怒らせたら怖いんだから」

そうだ、この中で一番まともそうなアーサーよ。王である私を助けてくれ。

「俺では、剣を出せても三十本が限度だから、合わせて百三十本になるか」

私は、次期国王になるレオンにも殺されるのだろうか。

「私なら粉々にしてゴブリンの餌えさ……いや、慰みなぐさものにするかしら」

「あつ、それなら、魔道具の実験台にするのはどう？ アドルのためにもなるだろうし」

ああ、マリアは私をゴブリンの餌……じゃなくて、慰みものにするとは、私が歴れきとした男なのを忘れたのか？

それにアーサーも魔道具のことになると周りが見えなくなるな。

「糞野郎、覚悟はできているか？」

レオンが凄すじんでくる。

今まで手塩にかけて育ててきた可愛かわいい息子と娘に追いつめられる。

ああ、どうやら私は子どもたちに殺される運命のようだ。

第一章 末っ子、寝場所を探す

狼に似た謎の生物に持ち上げられたまま、僕——アドルはどれほど回されたのだろうか。あまりにも目が回って、こいつに食べられるかもしれないという考えはどこかへ行ってしまった。気持ち悪くて動くのもやっただ。

『拙者に初めての友達ができたぞ！ お主、名前は？』

ようやく解放された僕は、ゆっくりと顔を上げる。

大きな体でもふもふとした毛。後ろには大きな尻尾しっぽがブンブンと揺れているのが見える。

話ができるなら、高位の魔物で間違いない。しかも、見た目がウルフ系だとすると、思い当たるのは、伝説の生き物と言われているフェンリルだけだ。

もし街に現れたら、一瞬でそこを破壊できるほどの力を持つと言われているフェンリル。

そんな生き物が僕の目の前にいる。

『僕はアドルだ。君はフェンリルか？』

話せるなら、直接何者か聞いた方が早い。

だが、フェンリルは首を傾かげて少し考えていた。太陽に照らされて光る牙が眩まぶしい。

ひよっとしたら、聞いてはいけなかったのだろうか。

『はにゃ？ 拙者はコボルトだぞ？』

僕の聞き間違いだろうか。

コボルトと言えば、ゴブリンやスライムと並んで、駆け出し冒険者が最初に戦う下位の魔物だ。

「いや、フェンリルだよ……ね？」

『はにゃ？ どこからどう見ても可愛いコボルトだぞ？』

あまりにも衝撃的な言葉に、僕は何度も聞き返すが、ずっとコボルトだと言い張っていた。

どこからどう見てもコボルトとは思えない。

当人は自らがコボルトだと証明するために、二本足で立ち、僕の周りを走っている。確かに、フェ

ンリルはそんな風に走らない。ただ、動くのが速すぎて、僕には残像しか見えない。

そういえば、出会ったときからずっとそうやって立っていたね。

『アドルはなぜこの島にいるんだ？』

「あー、あっちの島に行こうと思っていたんだけど、間違っちがってこっちに来たらしい」

僕が隣に見える島を指差すと、フェンリルは震えた。

『あそこは魔境だ。アドルみたいな小さいやつが無言で襲襲ってくるところだぞ！』

それはきつと、こいつがフェンリルだからだろう。

追い出そうと攻撃してきたのを、こいつは恐れて逃げただけな気がする。

僕の王国でも、さすがにフェンリルが現れたら全力で戦うはずだ。

放っておけば、街が壊滅するかもしれないから。

『今も何かに追われているのではないか！ 解除しておくぞ！』

フェンリルが指を鳴らすと、どこかで音が鳴った。

僕は誰に追われていたのだろうか。

それにしても、そもそもウルフ系とコボルトは体の作りが違うため、二本の足で立っているのはおかしい。違和感しかなくて気持ち悪い。

伝説によると魔法が使えるとあったから、こいつは確実にフェンリルだろう。

とりあえず、離れた方がいいと思いい、僕は回れ右をする。

『アドルをあゝ島に行かせないぞ！』

なのに気づいたときには体が浮き、フェンリルの肩に乗せられていた。

フェンリルの肩の上に乗るとか、死ぬ覚悟をしないとイケない。

落ちないようにがっちりと言いと首に掴まると、フェンリルは嬉しそうな顔をした。

この島から出る方法を探さないとイケないのに捕まった僕は、逃げることを諦めた。

森の中を歩くフェンリルに僕は声をかけた。

「名前はなんて言うの？ 僕だけ自己紹介したからさ……」

すると、フェンリルはグルグルと唸り声を上げた。

チラツと見える牙で僕を突き刺すつもりだろうか。

『これが自己紹介というやつか！』

いや、単に喜んだだけだった。

『拙者はコボスケだ！』

フェンリルはそう名乗った。

明らかに名前と見た目が合っていない。

まだフェンスケなら納得はできる。

本当に自分のことをコボルトだと思っているのだろう。

「君はどうやって生活しているの？」

『拙者か？』

「この島に食べものはあるのかなって。これだけ大きな森だと、どうも獰猛な魔物とか動物がいるんじゃない？」

実際、目の前には獰猛だと思われる魔物がいる。

自分のことを言われているのに気づかないのか、コボスケは首を傾げている。

『はにゃ？ 拙者、果実とかしか食べないぞ』

うん、ツツコミどころがありすぎて、なんにも言えない。

この体格で果実しか食べないとか、ダイエツト中の令嬢じゃないんだから。

『アドルはお腹が減ったのか？ ちょっと待っているよ』

その場で僕を降ろすと、コボスケはどこかへ走っていく。

今がチャンスだと思った僕は、全力で走り出す。だが、その考えは甘かった。

『アドル、どこ行くんだ？』

気づいたときには目の前にコボスケが立っていた。

「ごめんなさい！ 僕が悪か——」

目の前にいるコボスケに命乞いをしかけるのだが……

『そんなにお腹が減っていたなら、もっと持ってくるぞ？』

見ると、コボスケの手にはブドウがあった。

見た目はどこにでもある普通のブドウだ。ただ、目の前にあるのは、尋常じゃないぐらい大きい。

一粒が僕の手と同じ大きさだった。

『アドルにはちよつと大きかったか？』

全然受け取らない僕を心配したのか、フェンリルは丁寧にブドウの皮を剥き、渡してくれた。

果汁が溢れ出て、僕の食欲を刺激する。この島に来てから何も飲んでいなかった。

それにしても、コボスケは器用なようだ。

僕はブドウを受け取ると、むしゃぶりついた。

そうしないと大きすぎて食べられないからね。

「なっ……なんだこれは……」

甘くてジューシーで、幸福感に満たされる。

その瞬間、僕はブドウに取り憑かれたようだ。

『どうだ？ うまいだろ？』

「ああ、今まで食べた中で一番美味しいよ」

『本当か？ 本当にそう思うか？』

コボスケはブドウを褒められて嬉しいのか、尻尾をブンブンと振っている。

その勢いは周りの木々を薙ぎ倒すほどだ。

『へへへ、これが友達ってやつか！ 拙者、感激だ！』

その言葉に胸が痛くなる。

僕も、本当に信頼した友達なんていなかった。

ここまで素直に喜んでくれる友達こそ本当の友達な気がする。ただ、今の僕では対等に接するこ

とはできないだろう。だってフェンリルだよ？

今も僕の周りをグルグルと回っている頭がおかしいやつだけど、その気になったら一瞬で僕を食

べられるはずだ。

まずは様子見で友達になるしか生きていく方法はないのだろう。

喉の渇きが落ち着いた僕は再びコボスケに抱えられながら、森の中を歩いていく。

「いつもはどこに住んでいるの？」

『拙者か？ あっ、これが友達の家遊びに行くってやつだね』

ニヤリと笑ったコボスケは急に走り出した。案の定、ものすごい速度だ。

「あばばばば!？」

『へへへ。アドル、そんなに嬉しいのか？』

これは、嬉しいときの笑いではない。あまりの速さに、息ができなくて死にそうなのだ。口を開いただけでこの有様だった。

本当に風が強すぎて死にそうだ。

僕が思わずコボスケの顔を叩くと、ゆっくりと立ち止まってくれた。

『アドル、楽しいか？』

『あー、いや——』

嫌って言おうとした瞬間、コボスケは震え出した。

今まで友達がいなかったやつが、初めての友達に否定されたら立ち直れないかもしれない。

僕なんて才能がないから、否定されるのが当たり前の人生活ったのにな。

「楽しかったぞ！ ただ息ができないから、ゆっくり歩いてほしいかな」

すぐに言い直すと、コボスケの目がキラキラと輝いた。

これは、帰りたいと言えなくなるやつだろう。

『友達は思いやりが大事だったな！』

ああ、そう言われたら、コボスケを利用して僕らの胸が痛む。

『あああ、拙者はこのなことにも気づかないバカだったのか。一度死んで詫びないと——』

「いやいや、そんなことはしなくていいよ。コボスケは優しいぞ」

僕は、今にも岩に頭を打ちつけそうなコボスケを必死に止める。

本当に友達がなくて拗らせてしまったのだろう。

僕も拗らせている方だと思っているが、それを上回るほどだ。

『今初めてコボスケと呼んでくれたか？』

『ああ、確かにそうだね』

名前は聞いていたが、呼んだ覚えはない。

むしろ馴れ馴れしく呼ぶのが怖い存在だ。

だって、フェンリルをコボスケと呼ぶんだぞ？

いつでも自分を殺せる存在を、そんな名前で気軽に呼べないよ。

『うー！ 拙者、感激で頭が痛いぞ!!』

『おいおい、だからやめろよ!』

コボスケはあまりの嬉しさに、頭を岩に叩きつけた。

ああ、やっぱりこいつもおかしいぞ。

『うっ……頭痛がする……』

『あれだけ岩にぶつけていたら痛くもなるよ』

コボスケが岩に頭をぶつけると、一瞬で岩は二つに割れた。

さらに何度も岩に打ちつけるうちに、気づいたら周囲は細かい石だらけになってた。

ちなみに、コボスケの頭の傷は一瞬で治っていたから、やはりフェンリルで間違いはない気がする。

『拙者の寢床はここだ!』

連れてこられた場所を見て、僕は啞然とするしかなかった。

「本当にここで寝ているの?」

コボスケは頭を打ちすぎておかしくなったのだろうか。いや、おかしいのは出会ったときからか。僕が連れてこられたのは、岩が並んでいるだけの何も無い場所だった。

『拙者はこんな感じで寝ているぞ』

縦に長い岩の隙間に立つコボスケ。

あんなに美味しいブドウを食べているなら、住むところもしっかりしていると思っていた自分に言いたい。世の中そんなに甘くなかったと――

常にその姿勢で寝ていたから、立てるようになったのかもしれない。

「ここでは一緒に寝られないね」

チャンスがあればそのまま逃げられるだろう。

『拙者は友達ではないのか? 友達はお泊まりをするもんじゃないのか?』

コボスケは僕を睨みつけながら、グルグルと唸っている。

「んー、一緒に寝るのは構わないけど、立って寝るのは無理だよ?」

このままだと食べられるかもしれないと思った僕は、すぐにフォローすることにした。毎回思うが、コボスケの偏った知識はどこから得たものだろうか。

『はにゃ? 世の中みんな立って寝るんじゃないのか?』

「立ったままだと落ち着かないし……」

『あああ! 考えても何も思いつかないぞ! 拙者は友達失格だあああ!』

コボスケは地面に頭を何度もぶつけた。

地面の方が柔らかいのか、少しずつ地面が割れて、穴ができていく。

牙や爪は危ないという認識だったが、石頭も装備していた。

それにしても、さつき唸っていたのは、考えごとをしていたためだったようだ。なんとも紛らわしいことをする。

頭をぶつけてできた穴は、僕が寝るのにちょうどいい大きさになっていた。

「僕のために寢床を作ってくれたのかな?」

このままフォローせずにいたら、僕がああ地面のようになるだろう。

適当に葉っぱを敷いて、その上に寝ればどうにかなると思う。

『はにゃ? 拙者、アドルの役に立ったのか?』

僕が頷くと、コボスケは目を輝かせた。

少し手にかかる弟……いや、手にかかる脅威的な生物だね。

奇妙な行動をするコボスケのおかげで、寢床は確保できた。

コボスケは嬉しそうに、僕の周りをグルグルと回っている。

相変わらず速くて残像しか見えないけどね。ただ、これからの目標は決まった。

衣食住の“住”を整えることだ。

ここから逃げ出すには、コボスケと一緒にだときつと無理だろう。今もいつ食べようと思っているのか、目が光っている。

眩しいほどキラキラしているからね。

「じゃあ、あとは葉っぱを敷いたら寝床の完成だね」

『それは拙者にお任せを！』

コボスケは素早く木に登っていく。

そして数秒もしないうちに戻ってきた。

『これで足りるか？』

手には柔らかい葉をたくさん抱えていた。

どうやらコボスケは友達思いのようだ。ただ、朝まで一緒に過ごせるのか心配だった。

たくさんの葉を穴に敷き詰めたら寝床の完成だ。

周囲が暗くなってきたため、早めに眠った方がいいだろう。

「また明日ね」

僕が穴に入ると、コボスケはジーッと僕を見つめていた。

「どうしたの？」

『友達と一緒に寝るもんじゃないのか？』

「そう……なのか？」

友達のいない僕には何が正しいのかわからない。

でもここで拒絶したら、朝を迎えることはできないかもしれない。

「一緒に寝る？」

コボスケは尻尾を振って穴の中に入ってきた。だが、やはりフェンリルだから大きい。

『へへへ、お泊まり会はいいもんだね』

そんなに喜ばれたら、別のところで寝てほしいとは言えないな。

僕は黙って眠りにつくことにした。

『グルルルル！ グルルルル！』

僕の隣ではフェンリルが唸っている。

正確に言えばいびきをかいているのだが、一定のリズムで唸るから寝られない。

コボスケが立って寝ている理由を聞いたら、外敵から身を守るためだと言っていたが、これだけ唸っていたら敵も近づいてこないだろう。

「もう少し離れて——」

僕は抱きついてくるコボスケを一生懸命引き離そうとするも、力が強くて全く動かない。

コボスケが寝ぼけて僕を食べないか心配だ。

『へへへ、アドルとも……だち』

コボスケの寝言に僕は力を抜き、逃げるのをやめた。

知らない辺境の島に来て、一人でどうしようかと思っていたが、コボスケがいたから寂しさは感

じなかった。

貴族たちみたいに無視もしないし、しっかり目を合わせて話してくれる。何より僕のことを友達として一番に考えてくれた。

ひよっとしたら、本当に友達になれたかもしれない。

「コボスケ、ありがとう」

身動きの取れない僕は、コボスケの胸の中でもふもふしていたら眠っていた。

朝、目が覚めると、頭の上から嗅いだことのない匂いがする。

これはなんと言えはいいのだろうか。

「獣臭い」という言葉しか出てこない。コボスケの口臭だ！

「起きて！」

『んー、拙者まだ眠い——』

あれだけ大きいびきをかいて寝ていたのにまだ眠いのか、また眠ってしまった。

僕はいびきのせいで、ちゃんと寝られなかったというのに。

なお、試しに夜中に何度か脱出を試みたところ、意外と簡単にできそうだった。

僕は緩まったコボスケの腕の隙間から体を動かして抜け出す。ただ、これまでは勢いで穴から出

ようとすると、体を掴まれ、ズルズルと引き戻されてしまった。そこで——

『んっ……』

本当に寝ているのか確認する。瞼はちゃんと閉じていた。

そして、コボスケが反対に寝返りをしたタイミングで、僕は一気に穴から飛び出した。

その勢いで少しコボスケの体に土が乗ったけど、問題はないだろう。

まだ寝ているコボスケをそのままにして、森の奥に行くことにした。

あいつのよだれが顔面にベッタリとついているから顔を洗いたい。

コボスケのせいで僕の顔全体が獣臭で溢れている。

「朝だからすつきりするな……」

森の中は涼しい風が通り抜け、新緑の香りが鼻に広がる。

『ヌー！』

鳥のさえずりは聞こえないが、変わった鳴き声をする動物がいるのだろう。

『ヌー！ アドルは拙者を無視するのか？』

声の主は、後ろからついてきていたコボスケだった。

いつの間にか起きて、僕の匂いを追ってきたのだろう。

「コボスケのせいで寝不足だよ。顔もよだれでベタベタだし」

『友達はやだれを付け合う仲——』

「そんな友達いないわ！」

さすがに、よだれを付け合う仲はおかしいだろう。

おかしい……よね？

僕も友達がいるわけではないため、本当のことはわからない。ただ、明らかに知識が偏っているコボスケといったら、僕もおかしいやつになってしまう。

「それに、友達とは抱き合って寝ないぞ！」

『へっ!? 拙者、アドルに抱きついて寝ていないぞ?』

あれは無意識だったのか。

毎回動くたびに強く抱きしめられるこっちの身にもなつてほしい。

僕が怒っているからか、コボスケはチラチラと様子を窺っている。犬みたいな仕草だけど、どこからどう見てもフェンリルにしか見えないんだよな。

そんなコボスケを無視して僕は歩き出す。ただ、全く進まない。

『抱きつかなかったら一緒に寝るのはいいのか? いいのか?』

コボスケの爪が服に引っかかって動けない。返事をしないとずっとこのままだろう。

「いや……」

『グルルル』

「ああ、抱きつかなければいいよー！」

プラスで威嚇されたらどうしようもない。

爪は尖っているし、牙はキラリと光っている。

グサツと一刺しで、僕は死んでしまう自信しかない。

『夜這いを許されたぞおー!』

今度は喜んで僕の周りをグルグルと回っている。

「コボスケ、夜這いって何?」

『はにゃ? 夜這いは一緒に寝ることを言うんだぞ!』

どうやら一緒に寝ることを夜這いと言うらしい。

僕も知らない言葉だったから、少しだけ勉強になったかな。

「それで、川ってどこにあるの?」

『はにゃ? 川は反対だぞ?』

どうやら僕は反対の方向へ歩いていたようだ。

コボスケに案内されるがままについていくと、寝ていた穴のすぐ近くに川はあった。

水場の近くで生活した方が楽という生存本能からだろうか。ただ、その川が問題だった。

「ここって川なのか?」

『拙者、川と聞いたらここしか思いつかないぞ?』

これが川なら、僕が知っている川は一体なんだろう。

目の前にある川はかなり濁っており、砂が多く混じっている。

「コボスケ? これは沼じゃないか?」

『沼? 沼って、足を入れたら抜けなくなるやつだぞ?』

どうやら沼のことは知っているらしい。

沼を直接見るのは初めてだから、僕が間違えているのかもしれないが、やっぱり納得しがたいものがあるな。

コボスケは沼に入ると、足をバタバタと動かす。

高速で足を動かすことで浮けるのか、沼に落ちていかない。

きっとフェンリルのコボスケだからできる技だろう。

「それに、川なら魚がいるぞ？」

まだ川だと認められない僕は、さらにコボスケに聞いてみる。

『魚？ 魚ならあそこにいるぞ？』

沼からひよっこりと顔を出している謎の生物に気づき、僕は腰が抜けた。

その姿に驚かない人はいないだろう。

沼からギョロリと覗くその目は、あの生物しかない。しかも、右手には短槍を持っている。

今度こそ殺されるやつだ。僕はすぐにコボスケの後ろに隠れる。

すると、その生物が言葉を発した。

『あっ、どうも魚です』

「いや、どこからどう見てもリザードマンだろ！」

もう突っ込まずにはいられなかった。しかも、短槍だと思ったら、かなり大きめのフォークだった。

そのフォークは何に使うのだろうか。あれで僕を一刺しするつもりだろうか。

『いや、アドル、あれは魚だぞ』

『私は魚です』

『ほら！ 本人も魚って言っているぞ！』

コボスケは、隠れている僕を無理やり前に突き出した。

どこからどう見ても、リザードマンにしか見えないが、自分で魚と言っているなら、認めるしかない。

ここには、どこかおかしいやつしかいないのだろう。

「それで、そのフォークは何に使うの？」

『これでこの川にいる虫を刺して獲り、火に炙ってから食べています』

どうやらリザードマンも沼を川だと思っているようだ。

虫を食べるところは魚っぽいものの、炙ってから食べるんだな。

生で食なまべるとお腹を壊すらしい。意外だがリザードマンはお腹が弱いようだ。

『一度食べてみますか？』

「えっ？」

リザードマンは沼に戻ると、フォークに何かを刺して戻ってきた。

フォークの先には、足が何本も生えて、ウニョウニョと動く虫がついている。

「それはお腹壊すでしょ……」

『魚はこういう虫を食べるのが常識です』

やはりこのリザードマンも、誰かわからない相手に変な知識を入れられている気がする。

『拙者もたまに食べたけど大丈夫だったぞ？　むしろ便秘が治るから——』
「コボスケも食べたんかい！」

こんな虫を食べたら腹を壊すのは確実だ。
あと、フェンリルが便秘だったことに驚きた。

あの口臭を改善させるには、食生活から見直さないといけないのだろう。
ああ、本当にこの島にはおかしなやつしかいないね。

さすがに沼で顔は洗えないと思った僕は、海に向かうことにした。

『なぜ、拙者らについてくるんだ？』

『私も食生活を改めようと思ひまして……』

なぜかコボスケの後ろから、リザードマンがペタペタと歩いてついてくる。

足を生やし歩いている時点で、自分が魚ではないと気づかないのだろうか。

リザードマンはコボスケに何を食べているのか聞いていた。コボスケの食生活が気になるようだ。

リザードマンは逆に軟便で困っているという。

僕が見たことのある食べものは、ブドウとウニヨウニヨとした虫だけだ。

コボスケは果物を中心に食べて、便秘のときに虫を食べていると言っていた。

フェンリルなら肉を主食にしそうなイメージだけど、個体差があるのだろう。

「なかなか着かないね」

海までは思ったよりも遠く、森の中を歩くのは一苦勞だった。

昨日はコボスケの肩に乗っていたため、あまり遠く感じなかったが、実際はかなり距離があったのだろう。

改めてこの島の大きさを痛感する。

「コボスケも顔を洗って歯を磨きなよ」

『拙者の牙は磨かなくても大丈夫だぞ？』

「せめて、うがいはしたほうがいいよ」

さすがに当事者に向かつて口臭が気になるからとは言えない。コボスケは渋々海に向かうと、海

水を口に入れてうがいをしていた。

『ゴボゴボ……ペッペッ！』

コボスケは口に入れていた海水でむせた。

『アドル、口がしょっぱいぞ！』

「あつ、忘れ——」

『グルルルル』

「口の嫌なねばつきは取れるだろ？」

海水が塩辛いことを忘れていた。

また唸り出したからすぐに言い換えたが、大丈夫だったのか微妙なラインだ。

『グルルルル……ペッ！』

いや、これは唸っているのではなくて、単にうがいをしていただけだった。

一つ一つの動きが本当に紛らわしいぞ。

ちなみにリザードマンは、すでに沼で顔を洗ってきたらしい。

一際肌艶ひとよわはだつやがいいのは、リザードマンだからではなく、泥の影響かもしれない。

自然の泥パックを貴族の令嬢たちに売れば一儲ひともちけできそうだね。

僕も顔を洗うために海に近づく。ただ、思ったよりも海水の色が黒いぞ。

「うえ!？」

『アドル、あぶない!』

海の底から突然手が現れて、僕の顔を掴む。

あまりにも急な出来事に逃げることもできずに、そのまま引きずりこまれてしまった。

『アドルを離せ!』

コボスケが僕の足を掴み、必死に海から引き上げようとする。ただ、僕は顔を掴まれて海に入っているから息苦しい。

『魚、手伝うんだ!』

『私、海に入れないんです』

リザードマンが魚でないのは当然だけど、ドラゴンに近いのかな。リザードマンなら海の中ぐらに入れると思うんだ。

そんなリザードマンは、僕を海に引きずりこもうとしていているやつにフオークを何度も刺していた。じわじわとダメージが蓄積しているのか、次第に引つ張る力が弱まっていく。

その隙に僕は、相手の手から自分の顔面を引き剥がし、急いで陸に上がる。

「ゴホッ! ゴホッ!」

少し海水を飲んでしまったようだ。確かに塩辛い。

コボスケは僕の周りをクルクル回り必死に考えている。

『グルルル』

あの唸り声は何か嫌な予感がする。

『溺おぼれたときは人工呼吸か!? いや、犬呼吸か?』

犬呼吸とはなんだろう。少し気になるが、近づいてくるコボスケの顔を手で押さえる。

「大丈夫だよ」

『アドル、心配したぞー!』

コボスケが僕に抱きついてきた。心配させたのは間違いない。ただ、うがいをしても口から獣臭さを感じる。

「心配をかけたね」

僕が優しくコボスケの頭を撫でると、コボスケは尻尾を大きく振った。

たまに、フェンリルより犬に見えるのはなんだろう。

『あの一、これは食べられますか?』

そんな中、リザードマンが何かを持ってきた。

「あつ、魚なら……いや、これは無理だと思う」

リザードマンが持つてきたのは、魚に手足が生えた謎の生物だった。さつき僕を海に引きずりこもうとしていたのは、こいつで間違いないようだ。目の間に分厚い唇くちくちがあり、口がばかばかとしていたのを覚えている。

『いやん♡ 優しくし・て・ね?』

『滅!』

殺意が湧いたのか、リザードマンはフォークを何度も魚に突き刺した。

『ああん♡ やめてくださいよ♡』

目の前にいる魚は、情熱的な目でこっちを見ている。

言葉と動きが一致しておらず、体がブルブルと震えていた。

『ハアハア……もつと……』

いや、あれは確実に喜んでいるな。

そんな魚を、リザードマンは容赦なくフォークで突き刺す。

最後には口から火を吹いて、焼きはじめた。

魚よりリザードマンの方が気になってしまう。

こいつは絶対にドラゴンな気がする。リザードマンもどきのドラゴンじゃないだろうか。

『さすがに食べない方がいいと思うよ?』

リザードマンを止めようとしたら、魚が不服そうな顔でこっちを見た。

手足が生えている魚を食べたら、下痢げりどころか死ぬかもしれない。

『これは魚なので食べても平気ですよ?』

さつきまで自分のことを魚だと言っていたリザードマンが食べたら、共食いになるのでは?

そのことについて気にならないのだろうか。しかも、その発言を聞いた魚は、リザードマンにうつりし眼差しを向ける。

僕には止められる気がしない。あとは自己責任で食べてもらおう。

『アドルー! 魚を捕まえてきたぞー!』

リザードマンたちのものを離れようとすると、コボスケが両手に何かを持って走ってきた。

明らかに魚ではない何かに、再び僕は戸惑とまどう。

上半身は馬に似ているが、下半身は魚の姿をしている。

確か本で見たことある。伝説の生き物に、似た姿のやつがいたはずだ。

馬の上半身に魚の下半身――

『それはケルピーだよ!』

『ケルピー? それは美味しいのか!?』

ケルピーとは、水辺に住む馬に似た悪魔、もしくは海獣だ。

人間を誘おび寄せては溺おほれさせるという残忍な行為をするのが特徴だったはず。

『いや、食べたことはないけど――』

『なら食べてみるぞ』

コボスケはそのまま大きな口を開けて、ケルピーをもしかもしゃと噛み砕き、食べていく。

ああ、その食べ方はトラウマになりそうだ。

きつと僕が食べられるときは、大きさに丸呑みされるような気がする。

コボスケは数分でケルピーを完食した。

『あつ！ アドルにあげるのを忘れていたぞ！ 今すぐに別のを捕まえて——』

「あー、僕はいいよ。果物でお腹いっぱいになるからね！」

さすがに何かわからない生き物を食べる気はしない。しかも、馬に似たケルピーに虚^{うつろ}な目で見られたら、嫌でも脳裏に焼きついてしまう。

その顔を一生忘れることができないだろう。

それに、ケルピーは生で食べてもよかったのだろうか。

変な虫を食べてお腹を壊すという話なのだから、食べたこともないケルピーなら最悪の事態まで想定される。

『うっ……拙者、お花を摘みに行ってくるぞ！』

コボスケはお腹を壊したようだ。

しかも、トイレに行くことを「お花を摘みに行く」と言っていた。

ひよっとしたら、この島のやつに常識を教えたのは、どこかの令嬢なのかもしれない。

高速で足を動かし、コボスケは去っていった。

ケルピーも、便秘の改善としてはいいかもしれないが、食べるのは控えさせた方がいいだろう。

一方のリザードマンは焼き終えたのか、黒焦げになった魚を手にとっていた。

リザードマンは魚を食べる選択をしたようだ。

そういえば、以前家庭教師の先生から、何かを食べるときは焼きすぎと異臭、それに男には気をつけると言われたことがある。

なぜ「男」に気をつけると言われたのかはいまだにわからない。ただ、あの家庭教師も、変なことを教えるなど兄たちに言われて解雇されていた。

才能がない僕には教育などいらぬ、と兄たちは思ったのだろう。

「まずかつたらちゃんと吐き出——」

『私がいけないでしょ！』

魚はキリッとした顔で僕を見ていた。

黒焦げなのに、まだ魚は生きていたようだ。

『ああ、この上ない快感♡』

食べられたときの魚はケルピーと違って、すごく幸せそうな顔をしていた。

僕はしばらく魚を食べられそうにないな。

まだ何も食べていないことに気づいた僕は、一人でブドウを食べることにした。

リザードマンは魚が思ったよりも美味しかったのか、しばらく海に通うらしい。

『お腹がグルグル言っているぞ……』

お花を摘みに行っていたコボスケは、まだ腹痛と戦っている。

そんな僕たちは、新たな居住地を探すことにした。

コボスケに今のところは不満かと聞かれたが、さすがにあそこは雨や風には耐えられないと思う。そのときだけ岩の隙間に入って寝るのは快適な生活とは言えないからね。

水辺の近くがダメであれば、今度は山で雨風が防げる洞窟ドグクツを探そう。

コボスケは心当たりがあると言っていたが、 magari ザードマンや変な魚が出てくるかもしれない。それなら自分で探せばいいと思い、僕はコボスケとともに山の麓ふもとを目指して歩くことにした。せつかくだから山の方も探索して、この辺のことを知っておいた方がいいだろう。

「こつて、こんなに果物が多いんだね」

森の中を進むと、果物が多く実っていた。ただ、どれも異様なほど大きい。

コボスケの話では、この島にいる動物や魔物の多くは体が大きいというのだが、それはこの果物を食べているからではないか、とのことだった。

その話が本当であれば、このままいけば僕も巨人になっちゃうね。

無才能も、巨人なら活躍できるかもしれない。

『あそこに洞窟があるぞ！』

山の麓で、コボスケも余裕で入れるような洞窟を見つけた。

他の動物がいる可能性があるため、警戒しながら中に入っていく。

「コボスケ、友達だから頼りにしているよ」

『へへへ、拙者は友達だぞ！』

先に行くのが怖いから、友達という言葉を使って、コボスケに先に行ってもらおう。

ここなら魔物が襲ってきても問題はないだろう。住む環境としてはよさそうだ。

『こういう穴にはコウモリが住んでいるぞ！』

コボスケ、そういうのは早く言ってもらいたい。

コウモリは病気を持っていると思われる。

さすがにコウモリとの共同生活は無理だろう。

この洞窟での生活を諦めて、来た道を戻ろうと思った瞬間、僕は何かにつかつた。でも痛くないし、ふわふわしている。

『オラに当たったやつは誰だ！』

そのふわふわな存在に、僕は顔をスリスリする。

ああ、もふもふしていて、コボスケより寝やすそうな枕だ。

明らかにコウモリではないのだが、なんの生き物だろう。

僕が目を凝らして見ていると、突然洞窟内が明るく照らされた。

「くっ……目が痛い」

あまりの明るさに目が開かない。それはコボスケも同じだ。

『くああああ、コウモリはやっぱり眩しいぞ！』

コボスケの言葉に反応して、少し明るさが収まった。

今なんて言った？ コウモリ？ コウモリはやっぱり眩しい？

コウモリとは、あの犬みたいな顔に羽がある動物だよな？
目が慣れてきたところで、目の前の動物を見ると嘴くちばしがあった。

確かにこの島には変わった生き物が多いが、さすがにコウモリに嘴はないだろう。
それに、さつき光を発したのはこの動物だ。

『ごめんごめん。オラたちは基本明るいからね』

明るさが落ち着くと、そこにはもふもふつくらとした存在がいた。

明らかに、僕の知っているコウモリではない。そもそも実在しているとは思わなかった。

大きな体に赤く鮮やかな鳥。この鳥を見たら長寿になると本に書かれている。

「なんで、神鳥しんちようフェニックスがいるの？」

『はにゃ？』

『んにゃ？』

このコボスケの反応は毎回同じパターンのやつだろう。

『アドル、こいつはコウモリだぞ？』

『オラはコウモリだぞ？』

誰が教えたのかわからないけど、そろそろちゃんとした知識を教えてあげた方がいい気がする。

「コウモリはここに住んでいるの？」

『ああ、オラはここで子育てをしている。せっかくだから、子どもたちを見ていくといい』

さすがに子育ての邪魔をしないといけないと思っただが、ぜひにと言われた。

コボスケと違って危険はなさそうだから、フェニックスの子どもを見るために洞窟の奥に向かって歩いていく。

『アドル、拙者もどうぞ？』

コボスケは僕に背中を向けて、横向きで歩いている。

「どうぞって何が？」

コボスケが急いで向き直って詰め寄ってきた。まだ獣臭さが少し気になる。

ひよっとしたら、口臭より体の汚れの方が気になるのかもしれない。

『ヌー！ アドルは気づいてないのか？ 友達ともだちの拙者を差し置いて、コウモリをもふもふしていたぞ！』

どうやら、歩きながら先に行くフェニックスの体をもふもふしていたのがバレたようだ。

一枚でも大量の金貨になるぐらいすごい羽を、せっかくなら触っておきたい。
できるなら少し分けてもらって枕にしたいぐらいだ。

フェニックスの枕。ポカポカして、太陽の下で寝ている気持ちになりそう。

『アドルは照れ屋だから仕方ないな』

そう言っただけ、コボスケは僕の手を掴み、背中に乗させた。

僕が照れていると思っただろうか。

仕方ないと思っただけ、両手でもふもふを味わう。

『へへへ、これは毛繕けづくらいってやつだね』

フェンリルにとって毛繕いにはどういう意味があるのだろうか。

『オラの家族はここにいろぞ』

洞窟の奥には小さな声で鳴く、可愛い雛……いや、火を吹く雛たちがいた。

雛たちはお互いに火を吹いて、炙られそうになっている。

「まるでヤキトリみたいだね」

平民街では、串に刺した鳥の肉にタレをつけて焼いて食べるヤキトリを屋台で売っているらしい。目の前の状況に、それと近いものを感じてしまった。

『こいつら元気だから、オラだけでは育てられないんだ』

一度に何羽も産まれるのだが、餌を取りに行っているときに雛たちは火を吹いて、お互いを燃やし尽くしてしまいうらしい。雛のうちには、フェニックスといえども復活できないようだ。

そのため、フェニックスの子育ては一羽でも大人になればいい方だと言っていた。

巢の中で戦争が繰り広げられているとは思わなかった。

『だから、お主に育ててもらいたいんだ』

えっ？ 育てるって、フェニックスの子どもを？

火を吹く雛鳥をちゃんと育てられる気がしない。

それに、まだ自分の生活も成り立っていない状況だぞ。ただ、フェニックスの辛そうな顔を見ると、なんとも言えない気持ちになる。

フェニックスの親は子どもを産むたびに死に、すぐに生き返るらしい。

そういった過酷な出産と育児の繰り返しで疲労困憊なのだろう。

『羽根をあげるからどうか？』

「んー」

羽根を貰えるのはありがたいが、僕は鳥を育てたことがない。しかも、フェニックスとなればもっと不安だ。

『いつでももふもふできるぞ？』

「んー、悩むなー」

『アドル、もふもふなら拙者がいるではないか！』

コボスケはフェニックスと争っていた。別にもふもふしたいわけではない。

単純に触り心地がいいから触っていただけだ。ただ、雛は二羽しか残っていない。ここで僕が一羽預ければ、二羽とも確実に助かるだろう。

『オラの卵もあげるよ？ すぐおいしいと評判だ』

さすがに目の前で雛を見ているのに、卵を食べる気にはなれない。

とはいえ、せっかくだから僕も手助けをしたいな。

これで少しは何もできない無才能とは言われないはずだ。

「よし、わかった！ ただ、僕は子育てをしたことがないから、どうなっても知らないぞ？」

『両方死ぬ運命よりはマシだよ』

優しく見つめるフェニックスの顔は、昔見た母親の顔に似ていた。

そういえば、フェニックスはオラと言っていたが、メスだったのかな？

「コウモリはこの子のお母さん——」

気になったことを聞こうとしたら、鋭い目で睨まれてしまった。

世の中、聞かない方がいいことってたくさんあるからね。

「この子たちの名前はあるの？」

僕はすぐに話を変えることにした。

『生き残るかわからないものに名前はないぞ』

「おっ……おー」

あまりにも非情な現実を突きつけられて、何も反応がない。でも、名前がないと親子ともども見た目だけでは判別できない。

『さっき言っていたヤキトリはどうだ？』

そんな僕を見て、コボスケが名前を提案してくれた。

僕がつい呟いた「ヤキトリ」が気になったのだろう。

「ヤキトリはどうかな？」

『それでいいぞ』

少し抵抗はあったが、本人たちがいいなら決定だ。

「じゃあ、君がヤキトリで、子どもはモモとササミでいいかな？」

これなら覚えやすいし、ヤキトリから近い名前なので問題ないだろう。

僕たちはササミを預かると、コボスケの寢床に戻ることにした。

寢床に戻った僕たちは、再びどこに住むか考えていた。

「んー、他に住むのいいところはあるかな……」

ひよっとしたら、ここに小屋を建てた方が早いのかもれない。

結局どこに行っても誰かが住んでいるのであれば、コボスケが住み慣れた土地でいい気もする。

「コボスケはここに小屋を作るのはいいか？」

『拙者とアドルの愛の巣ってやつか！』

何か違う気もするが、コボスケも小屋を建てるのは賛成のようだ。

ササミのことを考えると、ちゃんと雨風を凌げる家があった方がいいもんな。

ちなみに、服の中でスヤスヤと寝ているササミは、一羽になると火を吹かなくなった。

生存本能で火を吹くのだろう。

「コボスケって木材を集められる？」

問題の小屋だが、木で作るか粘土ねんどで作るか迷っていた。

ササミが火を吹くなら粘土の家の方がいいが、木の方が作りやすいだろう。

そもそも粘土をここで見たことがなく、探すのに時間がかかりそうだ。

『それは拙者の得意分野だぞ！』

コボスケは近くにある木の前に立つと、体を斜めにして構える。

『フニャー!』

ひよっとしたら、フェンリルじゃなくて猫だったりしないか?

まさか、出てくる言葉が“ニャー”だとは思わなかった。

声と同時に拳を木に当てると、木が倒れた。その調子で次々と木を薙ぎ倒していく。牙や爪以外でも、力があんなに強いとは思わなかった。

寝ているときに抱きしめられていたが、あれでも手加減していたのだろう。

なるべくなら、コボスケの寝床とは離れたところに小屋を作ろう。

『アドル、たくさん持ってきたぞ!』

『ありがとう』

木を運んできたコボスケは褒めてほしいのか、頭を下げ待機している。

後ろに見える尻尾がゆらゆらと揺れていた。

僕がその様子を見つめていると、少しずつ詰め寄ってきた。

そして、仕舞いには頭で僕の体をドンドンと突いてくる。

その度に僕は後ろに倒れそうになるのを必死で耐える。

手加減しているのは気づいているが、自分が地面を簡単に割る頭なのをコボスケはわかっているのか?

『ごめんごめん』

僕が急いで頭を撫でてあげると、コボスケは唸り声をあげていた。

それと同時に、尻尾が左右に暴走する。

たまに僕の顔にバシバシと当ててくるのは、嬉しいからかな?

ただ、その尻尾ですら体に当たると痛い。

コボスケがさらに木を倒すと、周辺は何もない広い土地になった。

ここでならそのまま小屋を建てても問題はなさそうだ。

『ウインドカッター!』

風魔法を使って木の形を整えていく。

魔法は剣術に比べれば得意だ。

魔法省に勤めている兄や魔法神の申し子と言われている姉にはもちろんかなわないが、一般人レベルでは使える。

僕の姉は、初級魔法でも上級魔法並みの威力があるからね。

僕は魔力が多いわけではないため、時間をかけてゆっくり必要なサイズに木の形を調整する。

『アドル、拙者はもうできたぞ?』

作業に集中していて、コボスケのことを忘れていた。

僕はまだ一本も形を整えられていないのに、隣を見ると綺麗に山積みされた木材が置いてある。

僕の今までの努力には意味があったのだろうか。

『コボスケはどうやってやったの?』

『これは、爪でシャーってやれば一瞬だぞ?』